

歴史の散歩道

～安祥城址と古戦場めぐり～



《社寺》
平安時代の西三河には大規模な荘園が多くあり、安城市域とその周辺（昭和43年3月10日 市指定）は志貴荘の支配下でした。その中心である荘館の周囲の四隅に寺（東に常福寺、西に甲山寺、南に多宝坊、北に極楽坊）を建てたといわれています。
安祥毘沙門天は、この極楽坊に福德安全を祈願して祀られたものだったとされています。



《館址》
平安時代には、志貴荘の荘館があったとする説がありますが、詳しくはわかりません。安城城が築かれるまで地頭の居館として使われ、後に松平氏が安城城攻防戦で、しばしば使っていたといわれています。城郭ではなく、安城城よりも古い居館ということで「古城」と呼ばれています。



《市神》
平安時代、極楽坊の門前広場に設けられた市場の守護神として祀られたものといわれています。
昔、この場所から清水が湧き出したといわれ、弁財天を農業神とする信仰からか、稲作灌漑の用水としても使われていました。現在の堂は、明治36年（1903）に建てられたものです。



《陣屋跡》
元禄11年（1698）、旗本久永内記信豊が、碧海郡安城村、同郡米津村、加茂郡加納村、同郡三箇村に、4,354石を知行しました。その出先の役所を陣屋といい、安城陣屋は安城村に設けられたものです。はじめは、現在地より南の台地の突端にありましたが、その後移転し、明治維新まで使われていました。



《古戦場》
天文9年（1540）、織田信秀と水野忠政が安城城を攻めました。この時、松平康忠（安城城代松平長家の甥）は援軍として駆けつけ、水野軍と交戦し撃退しましたが、討死にしたといわれ、康忠を葬った所は東条塚、討死にした兵士を葬った所は千人塚と伝えられています。



《社寺》
徳川家康の祖父松平清康に従った家臣団とその家族は、出陣に際し大岡・上条・桜井の各社で武運長久を祈願したといわれています。これら三社は後に家康によって社領を寄進され、三河三白山と呼ばれるようになりました。天文2年（1533）に清康によって建立されたものの、兵火によって消失したとされる本殿は、永禄10年（1567）に家康によって再建され、現在では安城最古の建造物となっています。



《社寺》
三河三白山の一つである本社は、もとは大市社と呼ばれる大市郷の鎮守神であったといわれています。慶長8年（1603）、征夷大将軍となった徳川家康は社領50石を寄進し、本社の神宮寺であった神光寺を開基した米津盛門を祭祀にあたらせました。



《発祥地》
高木氏は清和源氏の流れをくむ一族で、その子孫で尾張緒川衆の高木清秀は水野信元に従い三河一向一揆で徳川家康側について軍功をあげ、家康からむかし高木氏が持っていたという名田を与えられました。永禄7年（1564）、この地に屋敷を構えたといわれ、天正18年（1590）に家康の関東移封に伴いこの地を離れ、相模国などに5千石の領地をもらいました。



《館址》
保科正直は、もとは武田氏に仕えた信濃国高遠城主でした。本能寺の変（1582）後、一時期北条氏に属しましたが、天正12年（1584）の小牧・長久手の戦の頃に徳川家康に属し、家康の勧めで妹婿になりました。これをきっかけとして山崎村に館を置いたとされますが、詳細はよくわかっていません。



《城址》
安城城が織田方の手にあり、岡崎城に松平広忠がいた頃、松平信孝（広忠の叔父）は広忠に仕えていましたが、勝手に所領を広げるなどしたため広忠と対立することになりました。天文12年（1543）に信孝は織田方につき、山崎城（大岡城）を築いたとされています。現在、神明社の北側に塀が残っており、当時の姿をよくとどめています。

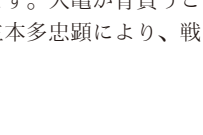
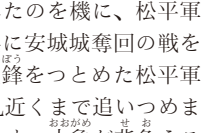
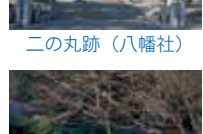


《古戦場》
天文9年（1540）、安城城が織田信秀、水野忠政に攻められ上条の西のこのあたりは激戦地となり、多くの兵が討死しました。後に安城城をめぐる合戦の戦死者を弔うため十三塚が築かれ、その中の一番大きな塚を富士塚と呼ぶようになったといわれています。今でも、戦のあった6月6日には供養の人がお参りに訪れています。

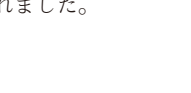
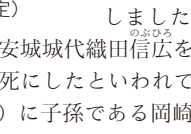
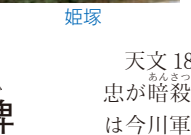
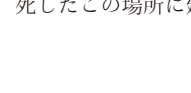
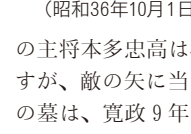
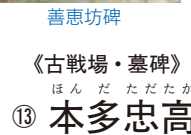
《城址》
安祥城址（安城城）
（昭和36年10月1日 市指定）



永享年間（1429～1440）に和田氏の居館として築かれたといわれています。もとは安城城と呼んでおり、安祥城と表記するようになったのは、江戸時代になってからのことです。
文明3年（1471）、岩津城の松平信光が謀略を用いて無血入城したといわれ、以後安城松平4代（親忠・長忠・信忠・清康）の居城となりました。



大永4年（1524）、清康が岡崎城に本拠を移すと、安城城には松平の将が城代となったようです。しかし、清康が尾張国守山に出陣中、家臣によって殺害された事件（守山崩れ）の後、清康の叔父で織田氏と関係の深い松平信定（後の桜井松平家）が実権を握りました。天文6年（1537）、清康の子広忠（家康の父）が今川氏を頼って岡崎城主に復帰しましたが、松平一族は、今川方とそれぞれにわかれて、骨肉の争いを展開しました。天文9年（1540）に織田信秀が安城城を奪い、城代として織田信広（信長の兄）を置きました。しかし、天文18年（1549）に今川軍の攻撃によって落城し、信広も捕らえられ、当時織田方の人質になっていた竹千代（徳川家康）との人質交換を経て、今川の将が城を預ることになります。永禄3年（1560）、桶狭間の戦いで西三河から今川が撤退すると、水野信元の勧めをもって、信長と家康の「清洲同盟」が結ばれました。これにより安城城は廃城となり、松平・織田・今川の西三河前線基地攻防の地としての歴史を閉じました。現在、本丸跡に大乘寺、二の丸跡に八幡社、その中間に安城城攻防戦で活躍したという善恵坊の碑や、亡くなった女性を葬った姫塚があります。また、大乘寺には安城松平4代城主の位牌が安置されています。



《古戦場・墓碑》
天文18年（1549）3月、松平広忠が暗殺されたのを機に、松平軍は今川軍と共に安城城奪回の戦をしました。先鋒をつとめた松平軍の主将本多忠高は、時の安城城代織田信広を本丸近くまで追いつめますが、敵の矢に当たり討死にしたといわれています。大亀が背負うこの墓は、寛政9年（1797）に子孫である岡崎藩主本多忠顕により、戦死したこの場所に建てられました。



《社寺》
明法寺は、文亀元年（1501）、本願寺から下付された阿弥陀如来絵像（方便化身像・市指定）を所蔵する真宗大谷派の寺院です。親鸞聖人が描かれた西本願寺の国宝「安城御影」の一つが、もとはこの明法寺にあったのではないかと伝えがあり、境内地には石像が建てられています。また、樹高20m、推定樹齢350年のイブキ（市指定）があります。



《墓碑》
安永8年（1779）、安城村の庄屋中川寛右衛門は不作に苦しむ村民のため、領主久永氏に年貢の減免を願い出ますが許されず、郷倉の中で血書を残し自決しました。その後、その年貢は減免されることになり、いつしか寛右衛門は安永の義民と称されるようになりました。明法寺には墓碑が、大乘寺には顕徳碑が、極楽寺には忠孝塔が建てられました。また、大乘寺北の門前の石碑のあるあたりが郷倉があったところで、寛右衛門が自刃した場所であるといわれています。

《井泉跡》
七つ井
（筒井泉／昭和43年4月1日 市指定）

なかでも筒井は特に良い水が出たといわれ、天文18年（1549）、織田と今川間の人質交換の和議が整い、竹千代（徳川家康）が岡崎に帰る途中、安城城に立ち寄り、この井戸の水を飲みました。その時、竹千代は「ぜひこの水を持って帰りたい」と言い、竹の筒に入れて持ち帰ったといわれ、それが筒井の名の由来であると伝えられています。また、筒井は安城城歴代城主の茶の湯として使われたともいわれ、この筒井のみが市の指定になっています。現在、七つ井のうちのどれか一つが使えず、石碑が残るのみです。



《信仰地》
安城市市場神（大黒石・エビス石）
（昭和40年10月1日 市指定）
平安時代、常福寺の門前に守護神として祀られたといわれています。ご神体はエビス石と大黒石と呼ばれる2つの自然石で、大黒石は以前、中井の横の道路に置かれており、市場の位置を示したものとされています。

《古戦場・墓碑》
天文14年（1545）9月、松平広忠は安城城奪還をめざして、有利に兵を進めますが、安城城に達した頃、尾張からの織田信秀の援軍に挟撃され危機に陥ります。本多忠豊は主君広忠を救うため、その身代わりとなって敵中に突撃し、この地で討死にしたと伝えられています。その場所に寛政6年（1794）、墓碑が建てられました。

本図の位置



安祥文化のさと 安城市歴史博物館・安城市埋蔵文化財センター



〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
歴史博物館 TEL 0566-77-6655 FAX 0566-77-6600
埋蔵文化財センター TEL 0566-77-4490 FAX 0566-77-6600
URL <http://www.city.anjo.aichi.jp>